

まちの元気じるし登場 ～企業訪問 丸重養鯉場～(山古志商工会)

新潟県長岡市山古志地域は、日本の原風景そのままに、美しい自然が多く残されています。中越地震では全国から多くの支援を受けました。震災から8年目を迎え、ようやく日常を取り戻しつつあります。

今回は、養鯉業を営む、『^{まるじゅう}丸重養鯉場』をご紹介します。

「錦鯉発祥の地」

“錦鯉発祥の地”山古志で、先代が始めた鯉屋を幼少期から手伝ってきたと話すのは、ご主人の田中重雄さん。

現在は、妻・悦子さん、長男・^{しげよし}重良さん(33歳)、次男・^{やすゆき}泰幸さん(31歳)、三男・^{みつぐ}三嗣さん(24歳)の家族5人が家業に従事しています。

昔から山頂にため池を作り、山の傾斜を利用して流れ出る水が棚田を潤してきました。ため池には真鯉が放され、海岸部から離れた山間部の貴重なタンパク源になっていました。

錦鯉は真鯉の突然変異とされ、発色した真鯉を養殖して品種改良を重ね、現在は80種を超す種類があるとされています。1914年に開かれた大正博覧会を機に、国内で広く知れ渡り、一大ブームとなりました。やがて住宅事情等もあって、国内での需要は伸び悩みますが、国外での人気上昇し、現在は出荷の8割強が海外市場に向けたものになっているそうです。



田中さんご一家

復興までの道のり

その地形からか、山古志はもともと自然災害が多い地域でしたが、中越地震は想定を超えた災害でした。連日のように、“山古志”の名がニュースで報じられ、たまたま取材に答える場面が多くあったという重雄さん。全村避難が報じられた際には、「田中さん、また再開しますか!?’という問いかけに、「決まってるねか、必ず戻ってまた鯉屋をするこって!」と、持ち前の性格から力強く即答。「全国放送で言った手前、後に引けなくなつて…。これで何が何でもやらんきゃならねと思った。」と、この時の一問一答が、自分自身を奮い立たせてくれたと、当時を振り返ります。

60枚ある池の修復には、自ら重機を操作して、寝る間も惜しんで作業を続け、1年が経つ頃には体力的にも精神的にも限界がきてしまいました。県外業者の手を借り、何とか復旧の目処が立ち、それから3年の歳月をかけ、多くの支援を受けて、再開するに至りました。



諦めないこと、焦らないこと

中越地震が縁で、神戸市のボランティアの方と知り合い、交流が続いています。継続的な支援に感謝し、神戸市内の各所へ、これまでに数千匹の錦鯉を贈り、山古志の錦鯉が人々の心を癒し続けています。

昨夏には、東日本大震災で被害を受けた福島県南相馬市への寄贈が実現し、約300匹の錦鯉が市区役所の庭池や、神社の池に放流されました。

「そんなことばかりしてられないけれど、自分たちもいっぱい世話になったからね。恩返し of 気持ちがあってもチャンスがなければなかなか出来ない。声を掛けてくれる仲間がいたから出来たこと。東北の被災者の方々には、頑張れではなく『諦めないこと、焦らないこと』と声を掛けてる。まだ余裕がないかもしれないが、山古志の錦鯉を眺めて心を癒してほしい。そして、錦鯉を見たら、山古志の田中が面白い事を言っていたなと、この言葉を思い出してもらえたら。」と重雄さん。

同じ経験をしたからこそ、痛いほど分かる、そんな被災地の方々を気遣う気持ちが伝わってくるようでした。

それぞれの思い

今後について、皆さんにお聞きしました。

「将来的には独立したいが、まずは家業をしっかりさせることが先かな。」と三嗣さん。

「誰が見ても『綺麗』だと言われるような錦鯉を作り、国内需要をもっと増やしたい。」とは、泰幸さんの言葉。

重良さんは、将来的な構想として、錦鯉を求めて、遠路はるばる来てくださるお客様のための“宿泊環境の整備等”を考えておられるそうです。

悦子さんは、「震災を経験したことで、自分達は、“繋げる役”なんだということに気がきました。兄弟で協調して、互いに高め合って、丸重の土台を固めてほしいですね。」と優しく語り、重雄さんは、「いい形で息子達に繋いでいかなければと思っています。錦鯉は芸術作品であり、個々の感性が大事。自分の色を出して、世界に認めてもらえるようになってほしいです。広い目でみれば、国内の愛好家をもう一度復活させたい！作るのも育てるのも“日本がトップだ”と言われるようになりたいですね。」と話してくださいました。

父と三人の若き後継者の活躍に、今後ますます期待が寄せられています。



【お問い合わせ】	丸重養鯉場
〒947-0205	長岡市山古志虫亀 898-1 TEL 0258-59-2351 / FAX 0258-59-2358